

研究名：絵本を中心に子どもと親と園を笑顔でつなぐ  
～みんなの心におはなしの種をまいていく～

施設名：社会福祉法人吉田福祉会 きららおひさまこども園  
社会福祉法人吉田福祉会 きららにこにここども園

研究者名：植松 詩織(きららおひさまこども園)  
井上 恵、齊藤 千恵(きららにこにここども園)

## 1. はじめに

幼保連携型認定こども園きららおひさまこども園は、平成25年4月、認可定員280名、職員数75名という大規模園として開園した。当園は、「好きな遊びを中心とした保育の実践」を行ってきた。保育を実践する中で、園児が絵本を乱暴に扱う姿が気になっていた。「本を大切に」という声掛けだけでは、子どもの心には響かない。ごっこ遊びの中で、本屋さんの本として使われることはあっても、「読んで」と保育者に持ってくることは少なかった。本棚にたくさん絵本が並んではいるが、手に取られた形跡のない本も多かった。

このような姿に、当時の園長より園併設の地域子育て支援センター(以下、支援センター)職員に、問題提起と問題解決にあたるメンバーとなってほしいと依頼があった。園長の思いに賛同した支援センター職員を中心に、2019年10月より「おはなし隊」が結成され活動を開始した。本研究は、「おはなし隊」を通して、子どもたちや職員、保護者へおはなしの種をまいていく活動を報告する。

## 2. 問題と目的

当園は、2020年度当時、園児数275名、職員数75名であった。以前から、園児が絵本を乱暴に扱う姿があったが、このような子どもの姿は、子どもたちが絵本やおはなしを純粋に楽しんだり、親しみを持ったりすることができていないからなのではないかと考えられた。しかし、クラス担任など直接保育に携わっている職員は、絵本・図書の環境整備や、おはなしの楽しさを子どもたちに伝える余裕がない状況であった。また、家庭においても保護者とゆっくり絵本やおはなしを楽しむ機会が少ないのではないかと、YouTubeなどの動画を見る機会も多く、絵本との関わりが減っているのではないかと考えられた。日々の活動を共にするクラス担任ではなく、絵本を読むことを目的とした職員による絵本の読み聞かせを実施し、園の活動の切り替えや間を繋ぐための絵本の活用ではなく、純粋におはなしを楽しむ、子どもの心におはなしの種をまくことを目的として行った。

## 3. 方法

### 【支援センター職員をメンバーとした理由】

- ◆ 支援センターが新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い開所時間を短縮していたため比較的活動時間の融通が利くこと。
- ◆ 日頃より、支援センターで「おはなしのじかん」を開催するなどし、子どもの心におはなしの種をまく活動を実施している実績があり、読み聞かせなどの経験が豊富なこと。
- ◆ 家庭保育に関する知識があること。

2020年1月から3月までの3か月間、毎日読み聞かせを実施した。新年度からのさらなる活動に向け、おはなし隊メンバーを増員し、2020年4月よりおはなし隊を本格始動させた。園全体で活動を広げていけるよう、支援センター職員に加え、園長、主幹教諭、学年主任の計7名で、「おはなし隊」として活動を開始した。

2020年4月の本格始動後、最初の会議を実施し、問題解決と目的達成のためにアプローチすべき事柄を次の4つのカテゴリーに分けて順次開始した。

カテゴリー1：【環境へのアプローチ】

カテゴリー2：【子どもたちへのアプローチ】

カテゴリー3：【職員へのアプローチ】

カテゴリー4：【保護者へのアプローチ】

以下にその内容を述べる。

#### 【環境へのアプローチ】

子どもたちを取り巻く環境を整え、おはなしの世界が魅力あるものだと伝えること、興味・関心を持てるようにすることを目的とする。

2019年10月 おはなし隊仮結成、2020年1月 3歳児クラスへの読み聞かせを開始した。

- ① 図書の見直し・・・絵本の状態と冊数の把握、整理整頓、絵本台帳の作成
- ② 年齢や発達に見合った選書
- ③ 魅力的な図書環境の設定

#### 【子どもたちへのアプローチ】

日々の保育の中で自然と絵本に寄り添う環境づくりと、子ども自身が能動的に絵本を手に取り楽しめる心と環境を整えることを目的とする。

- ① 2020年1月 保育室へ読み聞かせに行く活動を開始
- ② 2020年4月 おはなし隊本格始動
- ③ 2021年6月 おはなし会開催(毎月)
- ④ 2021年10月 「えほんたのしいコーナー」の設置

#### 【職員へのアプローチ】

おはなし隊が中心になり進めていく中で、その他の職員が置き去りにならない工夫と、園全体で絵本への興味や知識を深めることを目的とする。

- ① おはなし会後のアンケートの実施・・・園全体で絵本への関わりを強化するため、クラス担任へアンケートを実施
- ② 2020年4月 職員絵本紹介パネルの原稿依頼

#### 【保護者へのアプローチ】

園で絵本の整備や読み聞かせを浸透させ、子どもたちと保護者、保護者と園が絵本を中心とした輪を作り繋がることで子どもたちの心の育ちを連携して見守ることを目的とする。

- ① 2020年4月 玄関に、職員のおすすめ絵本を紹介する「職員絵本紹介パネル」の設置を開始。
- ② 2021年3月 職員絵本紹介を一年分まとめ、冊子にして配布。
- ③ 2021年3月 玄関に絵本コーナー（のちに「えほんたのしいコーナー」と命名）設置・・・園での絵本に関する取り組みを発信する絵本コーナーを設置した。職員絵本紹介パネルと季節の絵本を同じ場所に設置し、小さなベンチを置いた。
- ④ おたよりの作成・・・幼稚園向けクラウドサービスを利用し、保護者に向けて「おはなし新聞」を季節ごとに年4回配信開始。

#### 4. アプローチの効果の検証

##### 【環境へのアプローチ】

- ① 行き場が定まらず、雑然としていた本棚の絵本の中には、状態が古く、シミがあるもの、かび臭いもの、実際に黒い斑点状にかびが生えているものがあったり、折れたり、破れたりしているものもあった。このような状態の悪い絵本を処分したり、修繕したりして、整理整頓を行った。本棚にゆとりができ、新しいものを設置するための空間が生まれた。整理整頓と同時に絵本台帳も作成し、園内の絵本の状況を把握することも行った。これにより、季節に合わせた絵本の設置や、子どもたちの興味関心に合わせた選書も容易になった。
- ② 整理整頓前は、絵本よりも児童書が多く、園児が興味を持って自ら手に取ることが難しかった。そのため、新たに購入する絵本は、絵を見て楽しめる内容のものや、物事の展開が分かりやすいものを中心に選書した。
- ③ 園内に3か所ある本棚にそれぞれ色を割り振った。背表紙にもその色のシールを貼り、本棚と絵本の色をマッチングさせ、同じところへ戻せばよいことが一目見てわかるように工夫した。これにより、子どもたちが率先して片付けをしてくれるようになった。絵本台帳にもシールを貼る欄を設け、子ども園全体の絵本の冊数、カテゴリーなども明らかになった。背表紙だけでは文字の読めない子どもたちが興味関心に合わせて絵本を選ぶことが難しいと考え、表紙が見えるように設置方法を工夫したことで、自ら手に取り絵本を読むことを楽しむ姿が多くみられるようになった。また、子どもたちが自発的に絵本を手に取り楽しむ姿が増えてきたことから、絵本をじっくり楽しめる場所を設定した。園内は限られた場所しかないため、広いスペースの確保は難しいが、廊下の一角に絵本を読める場所を設定した。（写真①参照）

##### 【子どもたちへのアプローチ】

- ① 2020年度より読み聞かせの活動を本格始動するための準備として2020年1月に支援センター職員2名で、おはなし隊を結成した。そして、3歳児クラスにて実験的に読み聞かせを開始した。この読み聞かせは、全員が参加するように促すものではなく、子どもたちが遊んでいる中におはなし隊が自然に入っていく、聞きたい子に楽しんでもらう形をとることとした。3歳児クラスは3クラスであり、どのクラスも、クラス担任と違う職員が読み聞かせをすることに興味を示し、初日からクラスの半数程度が集まった。読み聞かせの活動を続けていくうちに、子どもたちも、おはなし隊の存在を見慣れたものとして認識するようになっていった。読み聞かせに行くたびに「おはなし隊が来たよ！」と他の友だちに知らせる子、

- 「今日は何読むの？」等と声をかけてくれる子が日に日に増えていった。
- ② 上記①の子どもたちの姿から、2021年4月より、対象を0～5歳児クラスに拡大して読み聞かせを開始した。読み聞かせに行く時間帯は、その日のクラスの活動内容や、月齢によっても異なるため、クラス担任と相談して決定した。(写真②-1、写真②-2参照)
  - ③ 2021年4月から月一回の会議をスタートし、第一回会議の中で、いつもと雰囲気を変えたおはなし会の計画案が出た。いつもは他の遊びの中での読み聞かせのため、日によっては他の遊びを楽しむ子の声などでおはなしが聞こえにくいことがあったり、集中して聞くことが難しい場面がみられたりした。そこで、2020年度は3歳児クラスが3クラスだったが、2021年度は2クラスになったことで、自由に使える保育室が容易に確保できるため、空いている保育室を利用しておはなし会をすることとした。(写真③参照)
  - ④ 保護者と絵本を繋ぐ場として、こども園玄関に絵本に関する情報をひとまとめにしたコーナーを設置した。コーナーに設定した絵本は季節に合わせてひと月ごとに入れ替えを行った。玄関コーナーに親しみを持ってもらえるよう、年長児にコーナーのネーミングを依頼した。その結果「えほんたのしいコーナー」という名前に決定した。「えほんたのしいコーナー」には、大きな木の幹の壁面飾りを用意し、子どもたちが遊びの中で自由に製作してもらい、その葉っぱを飾りシンボルツリーとした。(写真④参照)

#### 【職員へのアプローチ】

- ① おはなし会開催後は、クラス担任へ感想を聞くためアンケートを実施した。こどもたちの興味に合った絵本であったか、月齢に見合った内容であったかなど、様々な視点から回答を得られた。その回答結果が次回以降のおはなし会に反映されることにより、園全体での活動としてクラス担任も意欲的にアンケートに参加していた。
- ② 幼少期からのお気に入りの絵本、子どもたちが今、気に入っている絵本、保護者に読んでほしい絵本などを紹介してもらった。紹介する絵本を手を持った写真と紹介文を一枚の紹介シートにまとめ、4名ずつ、2週間に一度のペースで紹介した。(写真⑤-1、写真⑤-2参照)  
職員絵本紹介で他の職員がどんな絵本を紹介するのか楽しみにする保育者も多く、保育者同士が絵本紹介から、相手を知る機会となった。(写真⑥参照)

#### 【保護者へのアプローチ】

- ① コロナ禍により、保護者は職員のマスク着用時の顔しか知らなかった。保護者にとって、職員絵本紹介でマスクを外した表情を見ることができたことは、安心感につながったようで、多くの保護者から感謝の声が聞かれた。これは、想定していなかったメリットであった。
- ② 保護者からも絵本選びの参考になるとの声が多く聞くことができた。また、保護者向けに作成した冊子であったが、職員からの反響が大きく、冊子が欲しいという要望が多くあがった。
- ③ 設定当初は活用の頻度も高くなかったが、子どもの方から気に入った絵本を見つけてベンチに座り、保護者に「読んで」と声を掛ける中で、少しずつ利用する家庭が増えていった。設定を継続していく中で、親子で絵本を楽しみにする家庭も多く目に留まるようになった。親子での利用が浸透してきたころから季節の絵本に加え、園での行事に合わせた絵本や、保護者に向けた絵本を選書し、設定するようになった。(写真⑦参照)

- ④ 季節ごとに「おはなし新聞」を発行し、園内での読み聞かせの様子や、季節に合わせた絵本の紹介を実施した。さらに、保育ドキュメンテーションを活用し、クラス担任から読み聞かせの様子を保護者へ発信することで、いつもは伝えられない園内での子どもたちの様子を届けられることができた。

## 5. 継続と変化

【環境へのアプローチ】の①より ～絵本のお医者さんの開院と絵本棚の整理整頓の課題～

取り組み始めた頃は、職員の意識も高く、おはなし隊のメンバー以外の職員も絵本を読む時間を持つようとし、絵本の環境をより良いものにしようと意識していた。また、おはなし隊のアプローチにより、子どもたちが絵本を手にする機会が増えると、人気のある絵本の傷みが目立つようになった。今までのように乱暴に扱って傷むのではなく、多くの子の手に触れ、繰り返しおはなしを楽しむ過程で傷んでいる絵本が増えて行った。そこで、絵本を患者さんに見立てた「絵本のお医者さん」を始めた。お医者さんを支援センター職員が担い、壊れたり、破れたりした絵本を見かけたときに、子どもも職員も修理をお願いできる場所として活用した。絵本の状態により、数日預かり手直しする場合も、「入院」の言葉を使い、子どもたちにもわかりやすく修理修繕を伝えた。“治った”絵本は、お医者さんに届けてくれた子どもや職員に直接返すようにし、「また壊れた絵本があったら持ってきてね」と一言加えて返却している。一度絵本をお医者さんに届けてくれた子はその後何度もお医者さんを訪ねてくれることが多い。物を大切にすることを止める場としても大いに役立っている。子どもも職員も積極的に絵本のお医者さんを活用することで、傷んだ絵本がそのまま放置されず、魅力的な絵本コーナーの維持にもつながっていった。

一方で、年度が替わる度に大きくクラス担任が変わることで、おはなし隊の情報共有機能が低下していった。それにより、絵本棚の管理やおはなし隊の方向性が一致しないこともあった。また、おはなし隊メンバーとクラス担任とが直接対面で会議の機会を設けてこなかったため、同じ思いを持ち、同じ方向を向いてこども園の絵本環境を整えていくことが難しかったが、今後は、定期的に話し合いを開催することで、改善できる点は多くある。子どもたちに絵本を大切に扱い、親しみをもってもらうためには、まずは職員の意識を変えていく取り組みを進めていく必要があると考える。

【子どもたちへのアプローチ】の③より ～月一回のおはなし会開催の変化～

2021年4月におはなし隊メンバーを決定後、そのメンバーを2グループに分け、2021年6月より、毎月おはなし会を計画・実施した。毎月実施していくと子どもたちにもおはなし会が浸透していった。また、2021年8月からは、毎年園行事として夏祭りを開催していたが、コロナ禍により大人数で集まるのが困難になったことから、「おまつりウィーク」として一週間かけ、クラス単位での開催に形を変えた。そのおまつりウィークの目玉として、おはなし隊へおはなし会での読み聞かせの依頼があり実施することとなった。多目的室にクラス単位で集ってもらい、おはなし会を開催した。実際に実施してみると、じっくりと話を聞くことができ、落ち着いた雰囲気の中で存分に絵本の世界を楽しむことができた。また、食い入るようにおはなしの世界に没頭する姿が印象的でもあった。コロナ禍で密を避けるためのクラス単位での実施であったが、多目的室での少人数による読み聞かせを実施したことによるメリットは、コロナ禍でなければ気

が付くことができなかつたことである。

コロナ禍は、子どもたちには制約の多い園生活ではあつたが、新たな楽しみを伝える事ができた。その後も毎月のおはなし会を継続しながら、2021年12月には、園行事「クリスマスウィーク」としてクラス単位でのおはなし会を開催した。2022年も同様におまつりウィーク(8月)、クリスマスウィーク(12月)を実施した。2023年5月に新型コロナウイルス感染症が5類となり、園行事も以前の形に近い状況で開催されるようになった。それに伴い、「おまつりウィーク」がコロナ禍以前の夏祭りに復活し、おはなし会の実施はなかつたものの、それでも、おはなし会の人気は高く、2023年12月には「クリスマスおはなし会」を計画中である。2021年度末の反省会(2022年1月実施)では、“子どもたちにおはなしの種がまかされている”という実感はあるものの、それぞれの主職務と併せて継続することは困難であるという意見が多数であつた。しかし、おはなし会を1年継続したことで、楽しみに待っている子どもたちも多くいることを知り、おはなし会をどうにか継続したいという思いがおはなし隊メンバーにも、おはなし会アンケートの結果から他の職員にもあることが分かつた。(写真⑧-1、写真⑧-2、写真⑧-3、写真⑧-4参照)

#### 【子どもたちへのアプローチ】の④より ～えほんたのしいコーナーの変化～

シンボルツリーの葉っぱが経年劣化してきたため、改めて遊びの時間に葉っぱの製作を子どもたちに依頼した。現在も新しい葉っぱが茂っており、子どもたちは、自分たちの作った葉っぱが飾られることで、えほんたのしいコーナーへの愛着も増しているようだ。

#### 【職員へのアプローチ】

おはなし隊のアプローチ開始以前は、場面の切り替えや、活動と活動の間を繋ぐための絵本の活用はあつたものの、絵本を活動のメインとするような保育を行う保育者は少なかつた。しかし、アプローチを継続すると、子どもたちから発信される興味や要望に合わせ、“純粋に絵本を楽しむ時間”をそれぞれが考え、“子どもたちの心におはなしの種をまく”ことへの理解が深まっていた。その結果、絵本を保育活動のメインとして活用し、絵本を読み聞かせする姿が多くなつた。絵本を読み聞かせする保育者自身も絵本を楽しんでおり、読み手と聴き手が一体となって絵本を通じて楽しい時間を共有することができた。

#### 【保護者へのアプローチ】

職員絵本紹介を開始してしばらくすると、絵本紹介を楽しみしているという保護者の声を多く聞くようになった。送迎の際に閲覧する方が多く、子どもと紹介された絵本について会話をする姿もみられた。2021年3月より小さなベンチを設定すると、特に降園する前に1、2冊読んでから園を後にする親子が増えていった。定期的な絵本の入れ替えにより、新しい絵本が設定されると「絵本が新しくなっているね」と親子で読み聞かせの時間を楽しみにする家庭も年々増えている。

## 6. 考察

好きな遊びを中心に日々の保育が展開されている中で、月齢が上がるにつれ、絵本や読み聞かせへの興味が薄れているのではないかと感じることもある。おはなし会など特別感のあるときは、とても楽しみにしている様子が見られるが、日々の遊びの中での絵本との関わりは年齢とともに減っていく様に見受けられる。絵本以外にも、自分の遊びを見つけられるようになったからという見方もでき、それは、子の成長でもあると考えられる。しかし、せっかく繋がった子どもと絵本が遠く離れた存在にならないようにしていくために、どのようなことが必要かを園全体で考えていく必要がある。日々変化していく子どもたちに合った方法で絵本と繋げていくことができるのか、今、目の前の子どもたちは何を必要としているのかを見極めるおはなし隊のスキルの向上も今後の課題である。

## 7. 発展

### 1) 同一法人内の系列園の活動と両園の交流

おはなし隊の取り組みに賛同した、きららにこにこ子ども園（園児数129名、職員数49名）の職員4名（主幹教諭、地域子育て支援センターにこにこ職員）も加わり、2021年6月より両園合同のおはなし隊会議を開催した。また、同月にはきららにこにこ子ども園にも同様におはなし隊が結成され、毎月、各保育室への読み聞かせに行ったり、不定期にイベントとしておはなし会を開催したりした。コロナ禍で合同のおはなし隊会議の開催は継続しなかったものの、各園それぞれで月一回のおはなし隊会議は現在も継続している。今までのおはなし会の経験を活かし、両園のおはなし隊がお互いの園で読み聞かせをするイベントも実施した（2023年7月、両園で一回ずつ実施）。（写真⑨-1、写真⑨-2参照）

いつも読み聞かせをしてくれるおはなし隊のメンバーとはまた違う保育者による読み聞かせは、珍しさも加わって子どもたちも集中して見たり聞いたりする様子が見られた。

### 2) 同一法人内の放課後児童クラブとの交流

同一法人内に放課後児童クラブ（児童クラブきらら）がある。放課後児童クラブとも連携し、夏休みや冬休みの間のイベントとして児童への読み聞かせ会を実施した（2022年8月、2023年1月）。読み聞かせの導入にはマジックショーやパネルシアター、人形劇を取り入れたり、小学生向けの内容の絵本を選書したりした。また、低学年や中学年で時間と内容を分けることで、子どもたちが真剣に見入る様子も見られた。きららおひさまこども園、きららにこにこ子ども園の両園の卒園児が多数在籍していることもあり、読み聞かせをする保育者にとっても、子どもたちにとっても懐かしい顔ぶれであった。久しぶりに会う保育者に喜んで手を振ったり、学校での出来事を話したりする姿も見られた。（写真⑩参照）

## 8. 展望

～こども園と地域とのつながり～

両園を結ぶ中間地点に、みなみ親水公園という公園がある。大型遊具、芝生広場、大きな築山、ビオトープ等もあり、小川や池ではザリガニやメダカを見ることがもできる。保育の一環として子どもたちがそこへ出かけることもあり、園児には親しみのある公園でもある。休日だけでなく、

平日であっても降園後の子どもたちが保護者とともに過ごす憩いの場となっている。これらの親しみある地域の資源を生かし、今後、こども園と地域をつなぐ活動を展開していきたいと考える。例えば、公園内で地域の人に向けたおはなし会の実施を検討している。

また、当法人は高齢者福祉、障害者福祉事業も実施している。令和6年4月、既存の高齢者施設に放課後児童クラブを開所予定である。それを活かし、子どもたちと高齢者の多世代交流の手助けとしてのおはなし会についても展開していきたい。これまでの活動を通し、今後も絵本の可能性を信じ、絵本を中心として地域の輪を広げ続ける努力をしていきたい。



写真①：子どもたちがゆったりとくつろぎながら絵本を読むスペース



写真②-1：3歳未満児読み聞かせの様子



写真②-2：3歳未満児読み聞かせの様子

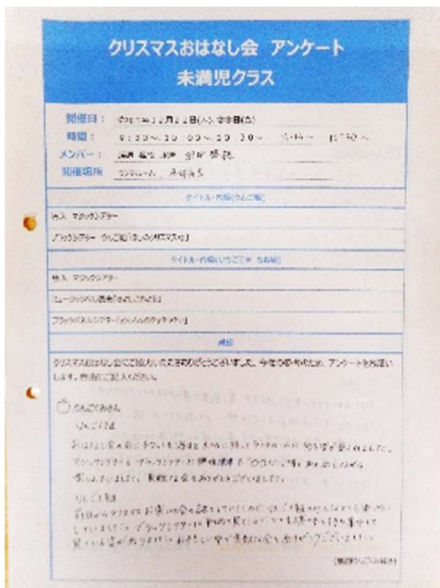


写真③：3歳以上児おはなし会の様子

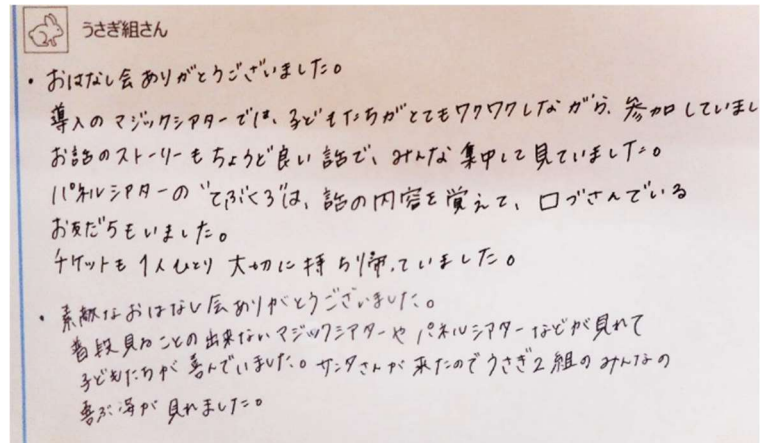


写真④：えほんたのしいコーナー シンボルツリー





写真⑤-1：おはなし会実施後のアンケート



写真⑤-2：おはなし会実施後のアンケートの拡大



写真⑥：職員絵本紹介パネル



写真⑦：えほんたのしいコーナー  
季節や行事の絵本を選書したものとベンチを設置



写真⑧-1：おまつりウィークの様子



写真⑧-2：おまつりウィークの様子



写真⑧-3：クリスマスおはなし会の様子



写真⑧-4：クリスマスおはなし会の様子



写真⑨-1：きららにこにこ子ども園のおはなし隊による読み聞かせ（きららおひさま子ども園にて）



写真⑨-2：きららおひさま子ども園のおはなし隊による読み聞かせ（きららにこにこ子ども園にて）



写真⑩：きららおひさま子ども園のおはなし隊による読み聞かせ（児童クラブきららにて）